

7 課

5月14日

アブラハムと 結ばれた契約



安息日午後 5月7日

暗唱聖句

アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」(創世記 15 : 2、新共同訳)

アブラムは言った、「主なる神よ、わたしには子がなく、わたしの家を継ぐ者はダマスコのエリエゼルであるのに、あなたはわたしに何をくださろうとするのですか」。 (創世記 15 : 2、口語訳)

今週の聖句

創世記 15 : 1～19 : 29、ローマ 4 : 3、4、9、22、ガラテヤ 4 : 21～31、
ローマ 4 : 11、ローマ 9 : 9、アモス 4 : 11

今週のテーマ

私たちは創世記15章において、神がアブラハムと結ばれた契約を正式なものとする決定的な瞬間に立ち会います。ノアと結ばれた契約以降、アブラハムの契約は二番目の契約です。

ノアの契約と同じように、アブラハムの契約は他の民族にも関わるものであり、最終的には、アブラハムと結ばれた契約は全人類に与えられた永遠の契約の一部です (創17 : 7、ヘブ13 : 20)。

アブラハムの人生のエピソードは、恐れと笑いに満ちています。アブラムはサラ (創18 : 15) とハガル (同21 : 17) と同じように恐れます (同15 : 1)。アブラムは笑います (同17 : 17)。サラも (同18 : 12)、イシュマエルも笑います (同21 : 9、英語標準訳)。これらの章は人間の感性と温情に共鳴しています。アブラムは悪徳のソドムの民の救いのために奮い立ち、サラ、ハガル、ロトに思いやりを尽くします。また、3人の旅人をもてなします (同18 : 2～6)。

このように、高潔で尊敬に値する者を意味するアブラムという名前は、「多くの国民の父」(創17 : 5) という意味のアブラハムという名前に変えられることとなります。このように、私たちは、アブラハムと結ばれた契約の中に、神がなさろうとしておられた計画の普遍的性質を知る多くのヒントを見いだすことができるでしょう。

問1 創世記15:1~21とローマ4:3、4、9、22を読んでください。アブラムは信仰によって生きることの意味をどのように示していますか。神がアブラムに献げるようお命じになった犠牲には、どのような意味があったのでしょうか。

跡継ぎがないこと(創15:1~3)を心配したアブラムに対する神の最初の応答は、「あなたの身から出る者」(同15:4、口語訳)が跡を継ぐという約束でした。預言者ナタンは、やがて来るべきメシアである王の子孫について言及する中で、同じ表現を用いています(サム下7:12)。アブラムは再び確信を得、「主を信じ」ます(創15:6)。なぜなら、彼は、神の約束の成就是、彼自身の義によらず、神の義によることを理解していたからです(同15:6をロマ4:5、6と比較)。

この考えは、当時の彼を取り巻く文化の中では極めて特異なものでした。たとえば、古代エジプトの宗教では、神の義を代表していたマアト神の義ではなく、人間の行いによる義が裁きの基準とされていました。つまり、人は自らの行いによって「救い」を勝ち取らねばならなかったのです。

その後、神はアブラムに犠牲の儀式を執り行うようお命じになります。基本的に、犠牲は私たちの罪のためのキリストの死を指し示します。人はこれらの犠牲が象徴する神の義の賜物である恵みによって救われます。しかし、この特別な儀式には、アブラムへの具体的なメッセージが込められていました。犠牲の動物が充鷹のえじきになるということは(創15:9~11)、アブラムの子孫が「四百年の間」(同15:13)または「四代目」(同15:16)まで奴隷となって苦しむことを意味しました。四世代の後、アブラムの子孫はようやく「ここに戻って来る」(同15:16)のでした。

犠牲の儀式の最後のシーンはドラマチックです。「燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた」(創15:17)。この驚くべき不思議な光景は、アブラムの子孫に土地を与えるという神の契約の約束を神が成就されるという、神の公約を意味していました(同15:18)。

この約束の地の境である「エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで」(創15:18)は、エデンの園の境を思い起こさせます(同2:13、14)。ですから、この預言は単に出エジプトとイスラエルの家郷以上の情景を示しています。アブラハムの子孫がカナンの地を手に入れるというこの預言は、終わりの時の神の民がエデンの園に再び戻るといふ救いの情景を展望しているのです。

私たちはどうすれば、唯一の救いの希望であられるキリストとその義を見つめ続けられるでしょうか。自らの善行を数え始めるとき、何が起こりますか。

問2 創世記 16：1～16 を読んでください。神の約束にもかかわらず、アブラムがハガルのところに入ると決めたことは、何を意味しますか。これらの2人の女性は、それぞれどのような信仰の姿勢を表していますか（ガラ4：21～31）。

アブラムが疑ったとき（創15：2）、神は再度、彼が息子を持つようになることを保証されました。それから数年が過ぎても、アブラムにはまだ息子がいませんでした。神の以前の力強い預言の後であっても、アブラムは信仰を失っているようで、サライとの間に息子を授かることができるとは信じていませんでした。絶望したサライは自ら、古代近東地方の慣習に倣って代理出産を強く勧めます。サライの側女、ハガルがこの役割をになうこととなります。この方法は功を奏します。皮肉にも、この人間の計略は神の約束を信じることよりも、より効果的であるように見えました。

アブラムに対するサライの働きかけの描写は、エデンの園でのアダムとエバの物語を思い起こさせます。これら二つの物語の中には多くの共通する点があります（サライはエバのように能動的で、アブラムはアダムのように受動的です）。そして、「その声を聞き入れ」「取って」「与え」といった共通の動詞や句が出てきます。これら二つの物語の共通点は、神が一連の行為を非難しておられることを示唆しているのです。

使徒パウロは、行いと恵みについて論じる中でこの物語を引用しています（ガラ4：23～26）。両方の物語の結果は同じでした。神の御心を離れた目前の結果を優先する人間の行いは、将来の問題を引き起こします。サライは神について語っていますが、神ご自身とは語っておらず、神もサライやハガルとお語りになっていません。特に、前の15章での神の〔アブラムへの〕強烈なご臨在と比べると、この神の不在は印象的です。

この後、神はハガルの前に登場されますが、それは彼女がアブラムの家を離れた後でした。このような予期しない神の臨在は、人間が神に頼らずに何かをしようとしたとしても、神は存在しておられることを明らかにしています。「主の御使い」（創16：7）という表現は、しばしばヤハウェなる主に用いられる称号です（同18：1,13,22）。ここでは神が主導権を握って、ハガルが男の子イシュマエルを産むことを告げます。この名前は「神はお聞きになる」という意味があります（同16：11）。皮肉なことに、この物語はこうして「聞くこと」（チャーマー）によって終わります。これはこの物語の最初に、サライの願いを「聞き入れた」（チャーマー）（同16：2）アブラハムの同じ行為を思い起こさせます。

アブラムが犯した過ちは、なぜ私たちも犯しやすいのでしょうか。

問3 創世記 17：1～19 とローマ 4：11 を読んでください。割礼には靈的、預言的にどんな意味がありますか。

先の物語（創16章）の中で見たように、アブラムの信仰の欠如は彼の神との靈的な旅路を妨げました。神はその間、沈黙しておられました。そして今、神は彼に再びお語りになります。神はアブラムとの絆を再度結び、彼と契約を結んだ時点で彼を連れ戻します（同15：18）。

それでもなお、神は彼に割礼という契約のしるしをお与えになります。割礼の意味は長く学者たちによって議論されてきました。割礼の儀式は血を流すことを求めるので（出4：25参照）、それは彼に転嫁された義を指し示す犠牲という文脈の中で理解されるべきでしょう（ロマ4：11と比較）。

割礼によって象徴されるこの契約が重要であるのは、それが最初に与えられたメシア預言（創17：7を同3：15と比較）を指し示すものだからです。これら二つの聖句は、神のアブラムに対する約束は、単に一つの民族の誕生にとどまらないことを意味しており、地上のすべての民族のための救いの約束であることをも示しています。「永遠の契約」（同17：7）の約束は、メシアの子孫の働きについても語ります。すなわち、「永遠の契約」は、信仰によって永遠の命を求めるすべての人々にそれを保証するキリストの犠牲を指し示しています（ロマ6：23、テト1：2と比較）。

興味深いことに、この永遠の未来の約束は、アブラムとサライの名前の変更にも含まれています。アブラムとサライの名はただ、彼らの現在の状態を表していました。アブラムは「高められた父」を、サライは「私の王女」（アブラムの王女）を意味します。「アブラハム」、「サラ」と変えられた彼らの名前は、未来を指し示すものでした。アブラハムは「多くの国民の父」を、サラは（諸国民の）「王女」を意味しました。同時に、皮肉にも受け取れるのですが、イサク（「彼は笑うだろう」という名前は、アブラハムの笑い（聖書に最初に記された笑い、創17：17）を思い起こさせます。この笑いは懐疑的なものなのか、あるいは、おそらく驚きによる笑いなのでしょう。どちらにせよ、アブラハムは神が明確に彼に約束なさったことを信じましたが、なおも信仰と信頼から離れて生きることによって苦闘します。

私たちはどうすれば、アブラムのように信じられずにもがくときがあっても、信じ続けることができるでしょうか。心に疑いが起きたときにもあきらめないことはなぜ重要なのでしょうか。

割礼の場面の最後は、すべての者たちを巻き込んで展開します。イシュマエルだけでなく、アブラハムの家のすべての男子は割礼を受けました（創17：23～27）。「すべて」「皆」を意味する「コール」という言葉が4回繰り返されています（同17：23、27）。すべての男子が割礼を受けた後、神はアブラハムに〔個人的に〕会って約束の息子「イサク」の誕生を確約されます。

問4 創世記 18：1～15 とローマ 9：9 を読んでください。旅人に対するアブラハムの接待から、どんなもてなしについての教訓を学ぶことができますか。

アブラハムは旅人の中に神ご自身がおられるかのように彼らをもてなしましたが、彼がこれらの旅人がだれであるかを知っていたかどうかは定かではありません（ヘブ13：2）。彼は「暑い真昼に、天幕の入り口に座って」いました（創18：1）。砂漠で訪問者はめったに来ませんから、彼はおそらく人に会うのを心待ちにしていたのでしょう。アブラハムは、すでに99歳になっていましたが、彼らを走り出て迎えます（同18：2）。彼は旅人の1人をアドナイ「わが主よ」（同18：3、口語訳）と呼びますが、それはしばしば神に用いられる称号です（同20：4、出15：17）。彼は大急ぎで彼らのために食事を用意します（創18：6、7）。彼は彼らの必要にいつでも応えて給仕できるようにそばに立ちました（同18：8）。

アブラハムの天からの旅人に対するふるまいは、もてなしについてのすばらしい模範です（ヘブ13：2）。事実、アブラハムの敬虔な態度は、もてなしの思想に通じるものがあります。旅人に敬意を払い、もてなすことは、単なる礼儀作法ではありません。聖書は、それが宗教的義務であり、神ご自身に向けられたものであることを強調しています（マタ25：35～40と比較）。皮肉なことに、神は、飢えと困窮に苦しむ外国人を寛大に受け入れる人よりも、そのような外国人の中におられるのです。

一方、人間世界への神の介入は、人類への神の恵みと愛を意味します。ここでの神の顕現は、天の家を離れ、人類に仕えるために人となられたキリストの先駆けです（フィリ2：7、8）。ここで神が顕現されたことは、神の約束の確かさの証拠なのです（創18：10）。神は、アブラハムの「後ろ」に隠れていたサラを見、彼女の最もひそかな思いも（同18：12）、彼女が笑ったのもご存知でした。「いや、……笑った」が〔彼女への〕神の最後の言葉でした。彼女の疑いは、神が御言葉を成就する場所となったのでした。

「神は、飢えと困窮に苦しむ外国人を寛大に受け入れる人よりも、そのような外国人の中におられる」ということについてさらに考えてみましょう。このことは私たちにとってなぜ忘れてならないことなのでしょう。

問5 創世記 18：16～19：29 を読んでください。預言者としてのアブラハムの働きは、口に対する彼の責任にどのように影響を与えましたか。

アブラハムは息子を与えるとの神の約束を再度確約されたばかりでした。彼はこの良い知らせを喜ぶ暇もなく、ソドムの口の運命について、神と熱く語り合います。アブラハムは神のご意志を示す預言者であるだけでなく、悪い者たちのために執り成す預言者でもありました。「主の御前にいた」（創18：22）とのヘブライ語の表現は、祈りを表す慣用句です。

事実、アブラハムは、甥の住むソドムを救うための神との交渉に挑みます。50人から始まり、10人までに至る交渉の末、神はもしソドムに正しい人が10人いたなら、彼らを救おうと言われます。

もちろん、2人の天使がこれから起こることを警告するために口のところに来たときの物語（創19：1～10）を読むと、ソドムの人々がどれほど痛み、悪に染まっていたかがわかります。この町は多くの周辺諸国と同じように、本当に邪悪なところでした。最終的に彼らがその地から追われることになったのは、それが理由の一つでした（同15：16）。

「今や、ソドムの最後の夜が近づいていた。神の怒りの雲は、すでに、この運命の町に影を投げていた。しかし人々はそれに気づかなかった。天使たちが、破壊の任務を帯びて近づいたときも、人々は繁栄と快楽を夢みていた。最後の日は、これまで明けて暮れたどの日も同じであった。美しい平和な情景に夕やみが迫った。たとえようもなく美しい風景は、沈む太陽の光を浴びていた。町の人々は、夜の冷気にさそわれて出てきた。快楽追求者たちの群れは、その夜の楽しみを求めてあちこちに行きかった」（『希望への光』77、78ページ、『人類のあけぼの』上巻166ページ）。

結局、神は口、彼の妻、そして2人の娘だけを救われます（創19：15）。それは約束の10人のほぼ半分にすぎませんでした。義理の息子たちは口の警告を真剣に受け止めず、町に残ったのです（同19：14）。

こうして、この美しい国は滅ぼされました。「滅ぼす」「覆す」を意味するヘブライ語の動詞「ハーフアハ」が、この場所に何度も出てきます（同19：21、25、29）。そして、この動詞がソドムの滅亡を特徴づけています（申29：23、アモ4：11）。これは、この国が「覆され」、「ぬぐい去られる」ことを意味しますが、それはちょうど洪水のときに最初の被造物が「ぬぐい去られ」たこと（創6：7）を思い起こさせ、ソドムの滅亡は、あたかもエデンの園が「ぬぐい去られ」たようでした（同13：10）。さらに、私たちはソドムの滅亡に、終わりの時の滅亡の前兆をも見るのです（ユダ7）。

参考資料として、『人類のあけぼの』第23章「律法と契約」を読んでください。

ソドムの人々のためのアブラハムの忍耐強く執拗^{しつよう}な神への嘆願は(創18:22~33)、絶望的な罪の状態にあるように見える悪い人々のために祈る勇気を私たちに与えます。さらに、アブラハムの求めに対する神の憐れみ深い応答と、わずか10人の正しい人のためにも喜んで赦そうとの神の姿勢は、実に「画期的」なことでありとゲルハルト・ハーゼルは述べています。

「究極の画期的な考え方の中で、罪なき者を罪ある者と共に罰する古い団体主義は、新たな考えに置き換えられた。すなわち、わずかの義なる残りの民の存在が、全体を救う役割を持ち得るのである。……義なる残りの民のゆえに、ヤハウエは彼の義(ツェダーカー)によって邪悪な町を赦される^{しもべ}のである。この概念は、『多くの者たち』の救いのために働かれるヤハウエの僕の預言の言葉の中に、広く拡大されるのである」(ゲルハルト・F・ハーゼル『残りの民——その歴史と創世記からイザヤ書に見る残りの民の神学』第三版150、151ページ)。

「われわれの周りには、ソドムにのぞんだのと同じように、希望なく恐ろしい破滅に陥っている魂がある。毎日、だれかの恵みの期間が閉じている。毎時間、だれかが恵みのとどかないところへ移っていく。それなのに、恐ろしい運命をさけるように罪人に訴え、警告する声はどこにあるのだろうか。罪人を死から引き返すためにどこに救いの手がさしのべられているのだろうか。謙遜に、しかも忍耐強い信仰をもって、罪人のためにとりなす人はどこにいるであろうか。アブラハムの精神は、キリストの精神であった。神のみ子ご自身が罪人のために偉大な仲保者になられた。罪人の贖罪のためにその代価を払われたかたが、人間の魂の価値を知っておられる」(『希望への光』68、69ページ、『人類のあけぼの』上巻142、143ページ)。

話し合いのための質問

- ① 虹と割礼だけが「契約のしるし」と言われています。これら二つの契約の共通点は何でしょうか。
- ② 神に召され、新約聖書ではしばしば信仰に生きた模範として描かれているアブラハムでさえ、時につまずきました。私たちは彼の人生から何を学び、何を学ぶべきでないでしょうか。
- ③ ある人々は、失われた者を罰することは、愛の神に反する行為だと論じます。神は愛であるがゆえに失われた者を罰すると信じる私たちは、彼らにどのように答えればよいでしょうか。